

南聲鎬氏博士（文学）学位請求論文審査報告要旨

『「舞う神」考 日韓民俗芸能比較研究』

日本の民俗芸能、韓国の巫俗儀礼には、さまざまな神々が登場する。神々の中には、人間に尊敬される位の高い尊位神もあれば、尊位神に付き従って登場する眷属神や職能神もある。また、人間から忌み嫌われ疎まれる精霊や悪霊も登場する。日本の民俗芸能や韓国の巫俗儀礼において、さまざまな性格を有する神々は、どのようなかたちで顕現するのだろうか。その表象は、いかなる特性を有しているのだろうか。このような問題を、「舞う」という演劇学の概念を用いて分析を試みたものである。

本論文は、以下の4部から構成される

第 部 芸能から祭儀へ

第一章 芸能から祭儀へ

第二章 韓国巫顕儀礼から見た宮廷の御神楽 園・韓神祭と鎮魂祭を中心に

第 部 神の顕現

第三章 神霊の顕現の方式 神がかりを中心に

第四章 葬送儀礼における芸能の諸相

第五章 神の表象 カミミチを中心に

第 部 舞う神と舞わぬ神

第六章 殺される神考 三番叟の思想的背景を探る

第七章 尻振り舞考

第八章 舞う神と舞わぬ神

第 部 舞う者と舞わせる者

第九章 舞う者と舞わせる者 韓国の巫俗儀礼の男巫（ファレンイ）を中心に

第十章 モドキと両部制

第 部「芸能から祭儀へ」では、本論の前提となる民俗芸能の特質について論じられる。その前提のもとに、第 部「神の顕現」では尊位神の顕現の仕方を分析し、第 部「舞う神と舞わぬ神」では従属神または下位神の表象を論じる。第 部「舞う者と舞わせる者」は、神々の顕現を表象する人間についての

分析である。このようなプロセスを通して、祭儀と芸能という異なった二つの性質を併せ持つ民俗芸能に関する南聲鎬氏の見解が提示される。詳細は、以下の通りである。

第 部 芸能から祭儀へ

ここでは、本論文の中心となる、舞う神と舞わぬ神、または尊位神と従属神、下位神の関係が、固定されたものではなく流動的な側面を持つことが指摘される。

具体的には、祭儀から芸能が生まれるという通説に対して、芸能から祭儀が生まれることもあるのではないかと、という仮説が提出される。もともとは従属神または下位神の表象だったと思われる翁や三番叟が、のちには神聖な祭儀の中に取り込まれて尊位神へと変貌を遂げる。「浦安の舞」の事例など、若干、適当ではないと思われる部分があるものの、提出された仮説は十分な説得力を持つものと判断される。

第 部 神の顕現

ここでは、神々のうち尊位神の顕現が論じられる。尊位神の顕現は「神がかり」というかたちで表象される。憑依するのは神だが、憑依されて舞を舞うのは人間である。南聲鎬氏は、尊位神は舞う神ではなく、舞わぬ神として顕現するという仮説を提出する。舞わぬ神の顕現は、蛇綱、天蓋、布などを振り動かしても行われる。このような顕現の表象を南聲鎬氏は「カミミチ」と定義している。

具体的な事例としては、「巫者による神がかり」「修験道の神がかり」「神楽の神がかり」が分析される。巫女の神がかりの場合でも、イタコのように個人の場合、イザイホーのように集団の場合に分類して検討される。

第 部 舞う神と舞わぬ神

ここでは、舞う神の性格が論じられる。舞う神は、殺される神であったり、滑稽な神であったり、セクシャルな神でもある。舞わぬ神である尊位神が祭儀の場を司る神だとすると、舞わぬ神は祭儀のあとの宴（直会）で活躍をする神になる。本論文の中核をなす部分になる。

第 部 舞う者と舞わせる者

ここでは、神々とそれを演じる人間の関係が論じられる。尊位神にかかわるのが巫女や神官などの専門的な宗教者であるのに対し、従属神や下位神または招かれぬ神々には助巫や法者など補助者が扮する。韓国の別神グッにおける巫女ムダンに対する男巫ファンレイ（花郎）の関係を、日本におけるシテとワキの関係に重ねて、舞う者シテと舞わせる者ワキという構造を示した。

第 部、第 部で論じた舞わぬ神 = 尊位神、舞う神 = 従属神・下位神という構図が、それにかかわる人間では、舞う者と舞わせる者に逆転する、ねじれ現象を指摘する。南聲鎬氏は、第 部で論じられた祭儀と芸能の問題とともに、背反する要素を併せ持つところに民俗芸能の演劇学的な特色を読み取ろうとする。

最後に、本論文の特色を三つ挙げる。

日本の民俗芸能と韓国の巫俗儀礼を比較するとき、対照するのではなく、同一線上に置いて論じ、民俗芸能における汎東アジア的な共通の性格を抽出しようとした。

事例報告にあたり、フィールド・ワークを基本としながらも、各地から送られてくる報告書を丹念に収集し分析を試みている。

本論文ほどに日韓の民俗芸能を多岐にわたって比較研究したものはない。日韓の民俗芸能研究において、新たな研究方向を示したものといえよう。

南聲鎬氏の提出した仮説には、すでに民俗学や文化人類学で指摘されているものも少なくない。「舞う」という演劇学の概念によって、それらの体系化を試みた点に、本論文の意義が認められる。立論に際して参照された先行論文にも妥当性があり、豊富な事例報告から引用された事例にも説得力がある。南聲鎬氏の問題意識は明確であり、研究の熱意と努力もまた顕著である。よって本論文は、博士（文学）の学位に相当するものと判断する。

2005年3月30日

主任審査委員	早稲田大学教授	古井戸秀夫
審査委員	早稲田大学助教授	和田修
審査委員	昭和女子大学教授	渡邊伸夫
審査委員	慶応義塾大学教授	野村伸一